

武蔵野日曜集会

随喜現神

――ヨハネ伝第5章19～47節――

1967年10月8日(武蔵野)

小池辰雄

神主^{しんしゅ} 哲学・芸術・科学・宗教 万人は宗教人 同心円的な即の世界に入る 随喜 死より生命に移る 十字架と聖霊の離すことのできない構造 仏教と福音の違い 随喜現神 キリストが私たちを捕まえていることの証 私たちは本来神の似姿 もはや死ぬことのない霊的實在に変わっていく 同円異中心

【ヨハネ5・19～47】

19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。22 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。25 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26 これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27 また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。28 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29 善をなしし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。

30 我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。31 我もし己につきて証せば、我が証は真ならず。32 我につきて証する者は、他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。33 なんじら前に人をヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。34 我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。35 かれは燃えて輝く燈火な



りしが、汝等その光にありて暫時よろこぶ事をせり。³⁶然れど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、³⁷また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声^{うご}を聞きし事なく、その御形を見し事なし。³⁸その御言は汝らの衷^{うち}にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。³⁹汝らは聖書に永遠の生命ありと思いて之を査^{しら}ぶ、されどこの聖書は我につきて証するものなり。⁴⁰然るに汝ら生命を得んために我に來るを欲せず。⁴¹我は人よりの譽^{ほまれ}をうくる事をせず、⁴²ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。⁴³我はわが父の名によりて來りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて來らば之を受けん。⁴⁴互に譽^{ほまれ}をうけて唯一の神よりの譽を求めぬ汝らは、争^いで信ずることを得んや。⁴⁵われ父に汝らを訴えんとすと思うな、訴うるもの一人あり、汝らが頼とするモーセなり。⁴⁶若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録^{しる}したればなり。⁴⁷されど彼の書を信ぜずば、争^いで我が言^{ことば}を信ぜんや』

● 神主^{しんしゅ}

19 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行^なうほかは自ら何事をも為し得ず、

「神さまがしてらっしゃることを見ているのでなければ、何もできない」ということ。30節にも、

「我みずから何事をもなし能わす」

という非常に断然たる言葉がある。

父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。

それはどういふことかという、20節に、

20 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。

からである。

また更に大なる業を示し給わん、

これから先もどんと。

汝等をして怪しましめん為なり。

「不思議に思うためである」と。「不思議」でもいいけれども、驚嘆ということ。「お前たちが驚くためである」と。「ためである」というよりもむしろ、「そうすれば、お前たちは驚くぞ」と。

イエスというひとは自分では何もできない、何も言えない。キリストの存在というもの



は手放しの存在ではない。ちょうど、地球が自分ではどうにもならんように、これは全く太陽に依存している。太陽に引っ張り回され、太陽の光熱で地球の生物は、生きとし生けるものは呼吸している。その依存が全く他者に依り頼んでいる。他者なくしては在り得ない。ということは、しかしながら、単に物理的な意味ではもちろんない。イエスというひとは一個の人格ですから。ある一個の人格者が――私たち一人びとりもそうです――完全に他者に依存して、もしそれが全然物理的に動いているのなら、それは人格者ではない。人格者が他者に依存してあるということは、その人格者の人格的世界の中に他者と同質、なものが来なければ、本当に依存するということはない。そこが非常に大事なことです。いわゆる我々が浸っている自我、自我意識というものは即ち、他者を抜いたところの手放しの意識です。現代の人たちはみなそういった自我意識で生きている。自由だとか、独立だとか言つてね。民主主義といって、自分自身が即ち主であつて、「神主」ということを――神主^{かんめし}ではない――神が主であるということをしつかり忘れていて。そして、この間違つた「民主」がこの自我意識になる。

今朝方、「十代の人との対話」というのをテレビでやっていて。みんな「大いに独立したい」と言う。「そのためにはどうするのか」と聞くと、ほとんどみな異口同音に、「金もうけ」と言つた。いかにして金をもうけ、貯蓄していくかということが、火急の問題、切実な問題であると。それはそうでしょう。けれども、そこでは、全然そういった物理的な生活のことだけが念頭にあつて、人間そのものの、自分そのものが問われていない。そういう角度が――なにもテレビに出てきた人ばかりではありませんが――今の若い方々のあるひとつの共通な面でなかうかと思われる。生活問題が切実だから、そういう手つとり早い経済問題になつてくるのはやむをえません。しかし、人間の人間たるところは、そういった経済的に満たされたからよいということではない。事柄のいかなる条件にも、いかなる状況にも、それが良からうと悪しかろうと、それにもかかわらず、それに支配されないところの、いや実にそれを逆に支配していくところの、そういった世界があるはずなんです。それを忘れていては、どんなに外側の環境や状況が良くなろうとも、その人はそれで決して本当の世界に入れるわけにはいかない。

● 哲学・芸術・科学・宗教

人間存在の究極の問題を考えるのは哲学です。しかし、考える哲学よりも、その問題に対する本当の解決を与えるものは、これは宗教の世界です。よく、

「哲学は疑いから発する」

と言いますね。しかし、「疑い」といつても、ただ妙な疑いというよりもむしろ私は、

「哲学は問いかけから発する」

と言つた方がいいのではないかと思う。



「どういうことであるか？」

という問いの問題です。哲学の世界は、その問いに対しては思索でいく。考えでいく。考えて、それは思想的活動となって、哲学的な最後は悟りということになるでしょう。その哲学的な悟りに近いぶ近い宗教が、それをもうひとつ次元を高くしたのが仏教です。

そんなことを言い出したから、ついでに言いますと、それでは芸術は何だろうか。芸術というものは好みから発すると思う。好きという、これは好ましいという――大体、美の世界ですから――好みというところから発する。そして、その好みの対象をどうするかという、考えない、直感していく。直感の世界、見る世界です。音の世界でも、音を観るとも言います。そして、これがシラーに言わせると、美的な遊びというところに来ている。「遊び」というのは、ただ遊戯で戯れるということではない。あるものを欲しがって、それをどうするというのは本当の美的な遊びではない。「ああ、あれは好ましい。欲しいな」と思ったら、それはもう美の世界からずれてしまっている。美をそれ自体として鑑賞する世界です。それが鑑賞から美的創作の活動になる。創作、創造になる。ダビンチでも、レンブラントでも、ベートーベンでも、ロダンでも、みな創作している。創造の世界です。単なる真似の世界ではない。まあそういったのが芸術の世界の動きではないかと思われまう。科学は何かというと、驚き、現象に対する驚きですね。この驚きが、しかし、科学の世界ではただ驚嘆しているだけではなくて、驚きに対して観察をする。実験、観察をやっている。そして、それを深く分析したり、総合したりして、その認識をする。そして、その認識の結果から今度は科学的創造の世界に入る。文明の創造がそこにある。今日の20世紀の文明というものは、そのような営みが非常に強く動いている。ついに月にまで行くようなことになった。

それでは、宗教は何かというと、まず、恐れから始まる。あるものに圧倒された恐れ、自分がいかにその前に小さいか、いかに汚れたものであるかという、その恐れから発している。それはオットーも言っておりますけれども。この恐れは、ただ恐がつているような恐れではない。宗教では、それから今度は、喜びにくる。喜びは、なぜ喜ぶかということ、恐れの対象が実は、憐れみ、愛の対象であることに気がつくことです。これを受けとることによって喜びの世界に入る。喜びは、単に喜んで有頂天になっているのではない。喜びの世界から力強いところの安らいの世界に入る。力強い安らいであり、平安である。イスラエル人が挨拶するときに、

「平安、なんじにあれ」(シャローム・レカー)

と言う。復活のキリストもそう言いました。「シャローム」という安らいの世界。安心立命なんて言うが、「安心」という安らいの世界です。そして、安らいでお終いではない。その安らいをなんとかして人に与えようという、救済の方に、救いの活動に、救済的な活動になってくる。



そういう意味において、芸術的創作にしろ、また科学的な創造にしろ、哲学的な思索の活動にしろ、本当に一人の人を救うというところにはいかなない。そこに宗教の次元がひとつ違ったものを持つている。全存在の救いということは、いかなる他の範疇はんちゆうにも出てこない。全存在的な救いという、死んでも死なないような生命の世界に入れるという、そこに宗教の劇的なものがある。また人間が普遍的に潜在意識の中で最も要求しているところの隠れたるものです。

●万人は宗教人

その意味からいっても、

「万人はこれ宗教人である」

のです。本来、死というものに限定されている我々です。

「死ですべてが終りである」

と言つて諦めている人は、どうぞそれでいい。けれども、誰でも死んでも死なないような世界を――今地震が来たときに、

「もう私は死んでもいい」

と言う人が誰かの中にいますか。もの凄い地震が来たら、みんな縁側から外へ出て行くとする。それは死を恐れ死を嫌っているわけです――本当の生を求めている。それは単なる肉体的な生ではない。全存在としての生命の世界です。

とにかく、そういう生命いのちを本当に生命いのちするということを求めている存在である。求めているということとは、存在そのものが祈っているということ。す。「祈りを知らない」とか何とか言いますけれども、我々はみな祈りの存在です。宗教的存在であるということは同時に我々は悲願的な祈りを持つている存在である。

その求める相手は、人間であるかぎり、それは霊的な、人間という事態に一番しっくりとそれに対応して、同質的にそれを無限の質の中にいれてくれるところの何ものか。悟りの世界では、それを仏、如来と言う。けれども、悟りではなくて、全存在的に本当に生命的なもの、それはこのイスラエルに示現されたところのヤーヴェーの神――キリストが「父」と言うよりか表現の仕方がない。もちろん、人間のお父さんではない――霊的実在者、生ける実在者として完璧に「父」という言葉でしか言えないところのもの。いわゆるドイツの神学で「脱神話」「エントミトルギズイールング」といって、宗教の世界からそういった大事なものを取り去ろうとするが、そんなことをしたら結局、宗教の世界の表現は全部ダメになる。実は宗教の世界の表現は、逆に言うとき非常に現実的な表現をしている。「父」と言いながら描くことができない、最も力強い霊的存在である。だから、

「神は霊であり、また父である」

ということをキリストがヨハネ伝4章で言われたようなわけです。そういった意味におけ



る対象として、イエスはこの「父」なる霊的実在者なくしては自分は在り得ない。はつきり、そういう自覚に彼は立つておられる。太陽がなければ地球が在り得ないと同じように、イエスにとつては、「父」なければ彼は在り得ない。

「と考えられている」のではない。そういう事実を生きているんです。「と思われ」たり、「と知られた」世界ではなくして、「という事実に生きている」ということ。福音の世界は、そのような事実に生きるのになかったら、どんなに聖書が解りましても、解釈されましても、意味が解つても、どうにもならん。そこが今のキリスト教がズレをきたしているゆえんであつて、我々はこの現実に生きているわけです。

このゴムの木にしろ、バラの花にしろ、みな太陽の光を受け、空気を吸い、水を吸っているという、その太陽、光、空気というものがわかつていても、それを現にじかじかに身に受けてこそ生命の世界でありますので、私たちが聖書を読むというのは、まさにその意味において、その文字の意味を知るのでなくして、これを本当に食らう。読みながら同時にその世界に入る。新しい人もいらつしやるから、よくそのことを私はまず言わざるをえないわけです。

●同心円的な即の世界に入る

だから、

「子は父のなしたもうことを見るのでなければ、自分では何もできない」

と。この「見る」というのは、「見て守る」ではない。キリストが「父」を見るといふのは、ただ見ているのでなくて、見て、現に見つ、その見ることによって相手の力が、知恵が、自分の中に入ってくる、そういう見方です。それはそういう言い方をするよりか仕方がない。霊的な実在者を見るといふのは、祈りの世界で本当にこれの中に入ることを、「見る」という。そうしたら、為すところを見たらば、自然にできる。

小さい子どもが何をするときにも、まず模倣をしますね。みんな見て、やる。模倣の世界でも、まず見なければ始まらない。そういうような具合に、現実を見ている。その現実の生命を生命とする、姿を姿とする、力を力とする、という見方がキリストの「見る」という見方です。

「聞く」と言つても同じことです。「神の言葉を聞く」と言つても、聞くことが直ちに自分の中に――そういうことを「聞く」と言うでしょ。「お母さんやお父さんの言うことを聞く」というあの「聞く」といふのは、「聞き従う」という意味の「聞く」です――そういう「聞く」という在り方をするわけです。これが本当の「聞く」なんです。聞いていて、

「まあそれはそうだろうけれども、私はこうだ」

なんていうのではどうにもならん。そういう見方、そういう聞き方が、「キリストが父を見る、父を聞いている」という在り方です。だから、



「父のなし給うことと同じ、同質のことを自分はすることになる」

と。もうひとつ先へいくと、「父の心を心とする」ことになる。何を見るんですか。父の心を見る。父の心を聞く。ということは、自分の中に「同心」がある。同じ心となる。同じ中心が同心的になる。父という大きな円があつて、そして小さな我という円がその中に同心に、同心円になるわけだな、物理的に表現すれば。同心円的になる。同心円的な即の世界に入るわけです。だから、そうでなくて、この驚くべき――円でも、球でもいいですが――これを抜きにして、自分がこつちに別な円なり球なりをつくらうなんていう、そんなのではない。そういう同心円的なことになるから、できるんです。

20 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、

その業がもう限りなく展開していく。ここに「子を愛して」と書いてある。愛するとは、自分の方に神さまが引き寄せる。また、自分をその中に投げ出でる――どつちも同じことになるけれども――自分の方に引き寄せて、同心円にしてしまう。また、もしここにいれば、そこへ上から降りてきて、その中に入る。どちらも愛の行動です。

●随喜

そういうようにして、父の愛をくださる。仏教に「随喜^{ずいき}」という言葉があるから、私は今日この言葉を使った。即ち、この随喜というのは、仏道に帰依^{きえ}して喜ぶということ。仏道に帰依する。よく、随喜の涙なんていう。帰依から生ずるところの喜びの涙。キリストはそのように、神の心を100%に見て、神を見、神を聞き、神の心を受けとることにおいて、これが本当に随^{したが}うということ。これに帰順することだね。それはそこにおいて何を見ているかというと、神の愛を見る。

「父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう」

という。そのような愛によって引き寄せられ、愛によって投げ出でるところのそういう中心に、神に自分を全くぶち任せてしまうと、そこに喜びが生ずる。

さつき、「宗教はまず恐れから始まる」と言いました。しかし、それは自分と桁違いなものにぶつかるから、始めは恐れる。よく聖書に書いてある。「懼^{おそ}るるなかれ」と。その恐れは、恐怖の「恐」の字から、むしろ「畏」の方に変わる。畏^{おそ}れ畏^{かしこ}むことになつて、それから、神さまは権威をもつて威圧するものではなかった。愛をもつて圧倒するものである。イエスは圧倒的な愛にぶつかりましたから、そこにどしどし、業^{わざ}が現われてくる。そうすると、キリストを通して現われてくると今度は、その御言にしる、御業にしる、

汝等をして怪しましめん為なり。

と。不思議と思わせる。さつき言いました、不思議とか、怪しませるといふのは実は、驚嘆させる。汝らを驚嘆、驚倒させる。驚倒と言った方がまだよいかもしれない。驚き倒れる。



福音書にぶつかって、私たちは驚嘆、驚倒する。

「聖書は驚嘆、驚倒して読むべき書なり」

と、私は前に自分の聖書の扉に書いた。なんと驚くべき現実であろうかと。

「一体こんなことがあるか」

なんて疑ったらダメですから。我々が判断してそんなことがあるようなことが書いてありつこない。そんなものだったら、それは人間の知恵で書いたものであつて、聖書の世界は次元がちがう、桁がちがうんだ。驚嘆、驚倒するけれども、決して、異質なものではない。次元がちがうけれども、

「実は、お前さんたちは驚かなくていいんだよ。懼るるなかれ。お前たちが本当に

この驚きの世界の、実にそれは結局は大きな喜びとなる」

と。驚き喜ぶという――「驚喜」という言葉はないけれども――驚き喜ぶというところに来るわけです。正直、私たちの体験で、福音書はなんと素晴らしい世界だろうと。そして、うれしくてたまらん。この随喜というのが正にそうです。キリストの中に自分を投げ込んでしまった事態、それが「随」です。そうすると、「喜び」が来る。イエスは烈しい言葉を言っているが、みんな実は、私たちを愛して、私たちを素晴らしい世界に入れようとする、その大愛の言葉であり、大愛の業である。であるから、魂が驚き、かつまた最後は喜ぶというのが、先程言いましたところの宗教の生命の段階である。

●死より生命に移る

²¹父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。

「死んだ者をも活かす」という。仏教の世界では、相対的な生とか死に対して、超越的な悟りの世界に入ろうとするが、この福音では、死んだ者を活かす。それはただ肉体的な意味ばかりではない。全存在的に霊肉ともに、死せるがごとき者を本当に活かす。いや実に、霊が本当に活かされなければ、肉も生きるわけにいかん。単に肉体が生きたつて――ラザロを復活させたけれども、それはまた死ななければならなかった――もし、ラザロがそこから本当に霊の復活まで受けたとするならば、彼は死んでも死なないということになるはずです。そのことは書いてない。死んでも死なないことになるには、あるひとつの大事な事態が必要であつたことは申すまでもないことです。

子もまた己が欲する者を活かすなり

と。今度はここでは、「己が欲する者」なんて言っている。キリストはなかなか、ものの言い方が乱暴で、いわゆる神学的な論理的にものを言わない。今度は、「己が欲する」という。父の欲するところばかり求めているキリストが、「己が欲するところ」なんて言う。もうこの場合の「己」「自分」というものは、「個」というものは――我^がと言っても何でもいいです



が――「わが意にあらず」という「我」ではない。「わが意にあらず」というのは小我で、小我的な我ではなくて、仏教的な言葉を使えば、「大我」です。「わが欲する」というのは、大我としての我。神に在る我。神と全く一つである我です。「神が欲する」のも「わが欲する」のも同じことになって、そこでこういうように書いてあるわけです。

22 父は誰をも審き給わず、審判をさへみな子に委ね給えり。

神さまがもし私たちを審かれたら、もう私たちは勝つことはない。どうにもならん。その審判までみんな子に委ねる。

23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。

神さまを敬うごとくまた子を同様に、即ちキリストを本当に拝するためであると。いかに神と我とがその意味においては一つであるか。

「自分は何ものでもない、何もできない」

と言っているキリストが、同じ口の乾かない間に、全く矛盾したようなことを言っておられるが、決してこれは矛盾ではない。自分が何ものでもないからこそ、自分が本当に神に在る、我となっているから、だから、一体であるということになるわけです。

子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24 誠にまことに汝らに告

ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、か

つ審判に至らず、死より生命に移れるなり。

はい。この24節は非常に大事な節です。

「私の言葉を聞いて、我を遣わし給いし者を信する」

というのは、「私の言葉」は私の言葉ではない。「私の言葉」を私の言葉なんて思っているから大間違いだと、キリストは言うわけです。わが言は同時にこれは神言、神の言葉ですから、要するに、私の言葉を聞いて、

「ああこれは神さまの言葉だ」

と思う人は、信じているということです。神さまの言葉だと思わないやつは、神さまはそこにいないというだけの話です。

「神は在るの無いの」と、そんなことを言っているのではない。神さまをいくら見ようとしたって、考えたって、これはダメですよ。神はキリストにおいて現象しているんですから。太陽の光はバラの花で現象しているんですから。

「バラの花を見ない限りは、太陽の光がわからない」

というのと同じことです。

「私の言葉を聞いて、ああこれは人間のいい加減な言葉ではなかった、これは神さ

まの言葉であつた」

と言って即、神言を受けとる者は即ち「神を信する者」です。すべてズレのない行き方です。

「それを受けとる者は――私の言を聞き入れて自分のお腹の中に入れる者、聞き入



れる者は――永遠の生命を持つ」

というのだから。

「わが汝らに語りし言は、霊なり生命なり。」(ヨハネ6・63)

とキリストが言われているように、

「私の言葉は意味ではないよ。人間の言葉は意味を考えたりするけれども、私の言

葉は生命であり、霊である」

と。だから、キリストの言葉を聞いて、私たちが聖書を読んで、直ちに生命の世界に入らなければ、その人は聖書を読んでいるのではない。

皆さんは、たとえば今朝、食べるためのお金がなかったら、食べなくなつていい。その代わり聖書を読みなさいよ。

「人はパンのみに生きるにあらず。神の言によりて生きる」

とあるように。ご飯の代わりに水を飲んで、そしてあと聖書を食らったら、もうそれよりか素晴らしい生命が来てしまう。とにかく、非常に自由な人になる。即ち、「神の言をくらう」こと。集会で霊に満たされてしまうと、お昼のご飯があまりおいしくない。お腹が別のもので満ちているから。集会のあとでご飯がおいしくてしょうがないなんてダメだよ、そんなのは。ことに青年諸君はよく聞いておかないと(笑)。

言葉を聞いたことが直ちに生命となる。

「わが言は霊なり、生命なり」

だから。何かしらんが、魂がうれしくなる。随喜の喜の字になる。喜びになる。喜びというのは、なにかそこに生命的なものがあつて、生命的なものが来なければ本当の喜びにならない。魂の世界はごまかしがきかないですからね、喜んだような顔したつて、それはダメです。

●十字架と聖霊の離すことのできない構造

永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、

と。もうそうなると、永遠の生命が来ているから、罪なんていうものから抜けてしまっている。キリストの「永遠の生命」は罪や死を滅ぼすものだから、審判に至らない。もう当たり前です。審こうとしたつて、審くものがなくなつてしまっている。だから、

審判に至らず、死より生命に移れるなり。

と。非常に端的であります。キリストはここでもなんにも十字架のことなんかしゃべつてない。だけれども、それがなかなかいかないのだから、仕方がない。最後に十字架の贖いをしなければならぬのでありますけれども。イエスは端的に、

「私の言を聞いて、聖書を読んで本当にじかじかに受けてしまった者は、審判に至らないで永遠の生命に行くんだ」



と。ということは、

「わが言は霊なり」

と言ったでしょ。聖霊と同じものだ。霊と言とは一つだと。聖霊を受けとったならば、もう審判に至らないのは当然であります。

構造として、我々はキリストの十字架における贖罪ということを受けとらなければ、我々の罪――「罪」ということは自我のことです――その自我というやつがどうにもならないから、自我が十字架されなければならない。自分でいくら砕けたってダメなんだ。

「キリストの十字架という砕けにおいて自我が砕かれている」

ということが「贖い」ですから。それを受けとる。

現実の自我は砕けていませんよ、我々はなかなか。

「現実の私たちというものがもつと砕けなければいかん」

なんて、自分を痛めつけたって、これはいつまでたつても始まらない。あいかわらずダメでいい。けれども、「ダメでいい」ということはただそれを単に肯定していることではない。「ダメでも仕方がない」ということ。自我がどうであろうと、その相対的な自我の良し悪しにかかわらず、もうひとつ奥の世界で完全に砕けているものを、はつきりと自我の砕けというものを頂いているというのが、これが本当の砕けである。だから、問題はいらん。いついかなる時も直ちに聖霊は来る。「もつと砕けなければ聖霊は来ない」ということはない。いついかなる時も聖霊は来るんです。

もつと乱暴な言い方をすると、聖霊がやって来れば、その砕かれないやつが砕かれていく。パウロがそうだった。砕けないんだ、パウロというやつは自我の強いやつでね。だから、仕方がないから、復活のキリストが現われて、

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか!」

と。言下にパウロはぶつ倒れてしまったでしょ。それは聖霊の力で彼はぶつ倒されてしまった。十字架なんかパウロはなにも分かりはしない。ぶつ倒されてしまって、そして、「もう参った!」と。それで、

「わが眼より鱗のぶるときもの落ちたり」

と言って、それから深く祈ったら、キリストの十字架が何ものであるかが彼に受けとられてきた。それが本当に贖罪の事態であつたということに後から気がついた。十字架に気がついてからパウロは砕かれたのではない。

我々の現実というものは人によっていろいろです。構造としては――論理的といいますか、霊的な構造としては――十字架というものが土台です。これは間違いない。そして、そこに祈るときに神の霊が来る。それでなかったらば、キリストに接する使徒たちは、キリストから直接に霊を頂いたらよかつたはずなんだ。けれども、やはり十字架というところを一遍通らなければどうにもならなかった。順序はどちらでも仕方がない。けれども、



実存の構造としては、十字架が土台であるということに間違いはない。そこをはつきりと受けとらなかつたら危ないです、ただ「霊、霊」と言っているのでは。しかし、その人が救われる順序として、

「十字架のことはよく分からなかったけれども、祈りの世界で聖霊に圧倒されたら、私は確かに変わった。そうしたら、本当に十字架のありがたみが分かってきた。そして、十字架がなければ本当に聖霊が楽に健全に入ってくる事態でないことが分かった」

と。いいですよ、それで。体験の仕方にはいろいろありますから。あるいは、ある人は知らない間にスーッとその世界に入った。ヨハネのように。いいですよ、それも。どれであってもいいけれども、十字架と聖霊の離すことのできないこの構造はすっかりつかまえられなければいかんわけです。とにかく、

「いつにならなければ聖霊は来ない」

というようなことはない。いつでも御霊はくる。御霊に圧倒されてください。そうすると、圧倒と同時に十字架がいかに素晴らしいものであるかに気がつくでしょう。また、十字架の恩寵に本当に浴してごらんさい。そうしたらば、知らない間に聖霊が来るでしょう。キリストが、

「自分の言を聞いて受けとった者は、永遠の生命を持ち、審判に至らず、死より生命に移った」

と言われた。今のクリスチャンはこういう言を率直に受けとるところの、霊的な大感謝というか、霊的な単純さというか、そういうものを非常に持たない。これが非常に希薄になっている。

²⁵誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、

「死んだ者が神の声を聞く」とはどういうことか、と思うでしょ。

今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。

死人の耳をも開くような、即ち結局、神さまの霊的、生命がこれを活かす。「枯骨を復活させた」というエゼキエル書37章の幻のごとく、そういう事態をここにはつきりと言っている。

²⁶これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、²⁷また人の子たるに因りて審判する権を与え給いしなり。²⁸汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。²⁹善をなし

し者は生命に甦えり、悪を行ひし者は審判に甦えるべし。

同じ甦ったって、どっこい、それでいいというわけにいかん。「善をなしし者」即ち、神に即して生きた者は生命に甦るが、神から離れて生きた者――これはただ行為の消極的な善悪を言っているのではない――神に離れたサタンに与したような生き方をした者は審判に甦る。「審判に甦る」とは「審判に至る」ということです。甦らされても、これは審判に来て、



「第二の死」に、永遠の死にもたらされる。

「永遠の亡びになるぞ」

とヨハネ黙示録にあるとおりです。

● 仏教と福音の違い

³⁰我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。

30節も非常に大事な節です。自分は、自分では何もできない。即ち、神から離れた自我というものでは何もできない。仏教の方でも、「無我、無私」というようなことを言う。結局、仏教の哲理も煮詰めてしまうと、無我の哲学です。

この「我^が」という字はサンスクリットで「アートマン」という言葉です。「アートマン」というのは「息」という字です。「氣息」です。人間の息でも空気の気でもみんな「アートマン」という。そういう素晴らしい意味を本来持つている。それが今度は、「自分」という意味に、それからいわゆる「我^が」という意味になり、ときには「身体」という意味さえもある。「アートマン」「氣息」という意味の善き面では、本体、本性、本質、霊、万有の根元なるもの。そこになると「ブラハマン」と今度は一つになる。即ち「梵^{ぼん}」というもの。「梵我一如」なんてことを言うのはそこから来るわけです。その梵我一如の我となったら、これが素晴らしいことになる。この我は即ち「大我」というもので、キリストが、「父に在るところの我」というのがこの梵我の我の方だ。同じ我というのが悪くなったり善くなったりする。だから、無我の我と言ったっていい。いわゆる我のない本当の我は、これは宇宙の根元の霊と即する我となるわけです。

何か物をわがものにしないということ。我^わがものにするような我はダメなんだ。「我がもの」というのはサンスクリットで「ママー」という。無我というのは、そういう「ママー」という、自分の我欲、我に属するもの、所有、そういうものから抜けろという。そこで仏教的にいうと、無欲というようにならなくては。そして今度は、無欲から、感情的な意味においても一切の感情を抜くような妙なことにだんだんなってくるわけだ。ギリシア哲学の中にもそういうスコラ的なものがあるけれども。

ところが、福音の世界は、それと大いに違うところがある。即ち、もちろん我は抜ける。けれども、無我、無私は、

「己をも憎まなければ。己を捨てて十字架を負わなければ」
とキリストが言ってる通りです。また、

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」

と言って、そういった相対的な愛までも、ある意味において否定している。ということとは、単に否定してお終いではもちろんない。ある大事な愛の世界に入るためには、相対的なも



のは全部まず否定してかかっていると、絶対愛の聖霊に入る。すると今度は、相對愛に自由自在に動いていく。それはもはや囚われたる相對愛でなくなるわけです。囚われたる相對愛、囚われたる所有の世界、そういうものはみんないわゆる我^がというやつが動いている世界である。

ところが、「無我の我」といわれる本来の「アトマン」、息という、霊という、全存在のある中心的なる根本的なものと――「もの」と言ったって、物質ではないけれども――そういったところの「アトマン」ということになる、それは何ものにも囚われない。その「囚われない」という消極の気持が仏教では強い。ところが、この福音の世界では、ただ「囚われない」というのではなくて、逆に一切のものを活かして、救い上げていこうという――もちろん仏教でも救い、「済度」ということがありますけれども――もつと生命的な角度が福音の世界ではずっと強いわけです。その点で性格的に違います。消極的な悟りの方と、積極的な救い上げ、生命付けていく方と。しかし、その根底において、とにかく無我という境地は、仏教の世界では、さっき言った同円というやつが全く悟りの意味の同円なんです。けれども、福音の世界では、「父」という霊的な実在者の中に自分を本当に入れて、どこまでも霊的人格としての自覚の角度が非常に強い。そして、霊的生命という質が非常に強いわけです。そういう意味において、いわゆる解脱だとか、身心脱落というような面ももちろん福音にありますけれども、性格ではなくして、一切を済度していく、霊法を本当に自分の中で満たしていくという力強いものがこの福音の世界では表れている。

●随喜現神

たとえば、『正法眼蔵』^{しょうぼうげんざう}の中に、

「仏道を習うとは自己を習うことである。自己を習うとは自己を忘れることである。

自己を忘れるとは方法に証せられることである。方法に証せられるとは自己の身心、他己の身心を脱落せしめるにある」

というように書いてある。だんだん自己、他己というものから脱落して、あるひとつの法の世界に帰入する。それは結構ですけれども、それが深い我々の実存を本当に活かすようなものにとちよつと性格が違ふんだらうと私は思う。もちろん、それは素晴らしい世界なんだけれども。

福音の世界では、自分を悟りの世界にだんだん持つていこうとするのではなく――まあ悟りも、禪宗ではいわゆる悟りは悟りではないということも言ってますけれども――天真爛漫にあるがままの自分を神の中に、キリストの中に投げかけて、キリストと同質なものがそこに動いてくる。それを私は、「随喜現神」と今日は言っただけです。キリストを見て、直ちにその世界に入って、この霊の世界に燃えて、喜びが溢れる。「神―キリスト―我」という生命的な喜びの溢れた世界において、キリストが神を現象せしめました。そのように



私たち自身の中に神が現われる。神を証する。即ち、その事態を、

「聖書は我につきて証する^{あかし}」

なんて言っているでしょ。そのように私たちが、キリストが「聖書は我につきて証する」と言うが、我々も聖書の文字によつて証せられるような、そのような現神の事態に――手放しでは行きませんけれども、どんなに私たちが惨憺たる現実、ダメな我であっても、そのダメさ加減はもはや問題にしないで――そのまま投げかけた我においてこの神的なものが現われるというような、こういったのが本当にキリスト者である。

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロが言ったけれども、

「御霊において神を、神的なものを現する者にあらずばキリスト者にあらず」

と言つていいわけです。即ち、

「汝ら、わが証者となれよ」

とは、そのような存在、即現象、現象即存在というようなことになっていけと。あいかわらず破れ衣で構わない。「構わない」ということは、それがそれでただ手放しでいいということではない。仕方がないから、構わない。けれども、本当にその人を通して、まことなるものが現象していく。それだけの事態がもつと積極的に受けとられていかなければいかんと思う。

●キリストが私たちを捕まえていることの証

テレビを見ていたら、「原理研究会」というのをやっていた。学生が学校そつちのけでやっている。40日間か、日本全国に派遣して布教をやっている。彼らの在り方を見ていると、とにかく彼らはあるひとつの捨身な態度をもつてやっています。なにも私はそれに感心するわけではないけれども。クリスチャンが何もあんな真似をすることはない。けれども、我々の普通の生活において――学校そつちのけなんてでは困る。みなそれぞれの仕事であらうと、学校であらうと、何であらうといい――そこを通して本当に神の活現するところの、キリストの活現するところの事態が何かにしみ通るような、ある時は迫るような在り方がないならいいかん。このキリストが、

「われ自ら何事をも為し能わず。されど、われ神においては何事をも為し能う」

というこの現実を、私たちがキリストの霊を頂いているのなら、どんなに惨憺たる現実であらうとも、やはり同質なものがそこに現われていなければならないわけです。

「自分は自分について証するなら、それは本当ではない。けれども、私の業が――他に証人はいらん――私の業が、言い換えると、私の存在そのものが神を証しているではないか」

と、キリストがそこで言っておられるわけです。



31 我もし己につきて証^{あかし}せば、我が証は真^{まこと}ならず。32 我につきて証する者は、他にあり、その我につきて証する証の真なるを我は知る。33 なんじら前に人をヨハネに遣ししに、彼は真につきて証せり。34 我は人よりの証を受くる事をせねど、唯なんじらの救われん為に之を言う。35 かれは燃えて輝く燈火^{ともしび}なりしが、汝等その光にありて暫時^{しばし}よろこぶ事をせり。36 然れど我にはヨハネの証よりも大なる証あり。父の我にあたえて成し遂げしめ給うわざ、即ち我がおこなう業は、我につきて父の我を遣し給いたるを証し、即ち、

「私たちのクリスチャンの実存が、キリストが私たちを捕まえていることの証である」

と、我々はこの言葉を我々自身の言葉としては、そういうように受けとっていくわけですが、これはある本から引用した言葉ですが、

「何ものかを我がものであるとして執着して動揺している人々を見よ。彼らの有り様は、源水乏しい干からびた所にある魚のようなものである。これを見て、我がものという思いを離れて行うべきである」

これは原始仏教の世界のあるひとつの言葉だそうですが、要するに、自分から抜け出ている。

● 私たちは本来神の似姿

「何事をも為しあたわず」ということは、要するに言い換えると、

「もう私は完全に神さまから離れるわけにいかない」

ということですが、

「私の言ったりしたりすることは全部これは神から来ているんだ。これを離したら、

どうにもならん。私は神抜きではどうにもならん存在でござる」

というのがキリストの自覚なんです。

ということは、さっき言った、「アートマン」というのは、福音の世界では、私たちは本来、「神の似姿」につくられている。その似姿につくられている霊は、その中に本来は御霊をどうしても入れなければいけないところの霊的存在である。本来、神の似姿なんだから神の似姿であるものが神に連ならなかったらどうにもならんことは当たり前なんだ。それはこれが切れてしまったから、このキリストでもつてつながるために、キリストの中に本来に入らなくては。本来、これは「神の子」であるということをもつとキリスト・メナは自覚していかなくてはいいかん。プロテスタントが「罪、罪」と言って、あんまりダメな自我というもののぼっかり見ている。そして、何とかしてキリストの十字架で救われてどうのこうのと、気休めばかりだ。そんな気休めをやったって始まらん。それよりも、

「本来は、お前は私がつくった子ではないか。心配はいらんよ。大胆に望んできな



さい」

と。本来、神的な質がみんなある神の子なんだ。そこに気がついて、

「ああ、なんと私たちは単なる物理的な存在ではなかった。実は、霊的な存在であつた」

と。その義の扉を開いたら、神の現象体であるキリストから直接にウワツと生命の交流に、生命の世界に入る。キリストを受けるとか、聞くとか、見るとか――何だつていい――直ちに自分の中に生命が復活している。そして、自分はもう「罪、罪」なんて言うのはよそうと。そんなことを言つたつて始まらない。キリストの光です。光を、その生命を、その愛を、いやキリストそのものを点じようということに、もつと、皆さん、端的に行きなさいよ。なんか、迂路をたどつてウロウロしている。もつと直線で行けばいい。特に若い人たちはそのように大胆に行くがいい。そうしたら、なんとまあ面倒くさいことを今まで考えていただろうか。なんと単純でまた素晴らしい世界かと。そこからもの凄い力が出てくる。

「御霊を与えて限りなし」

という。それで、何をやつても、今度はもうそれが勉強であろうと、仕事であろうと、何であろうと、そこから迸つてきます。

そういう意味において、仏教的な本来の世界に立ち返るというような行き方をもつと福音的にははつきりと受けることができる。それが本当の随喜なんです。そうしたら、その随喜の世界には前進してくるところの事態が現われてくる。これをひとつ、勇ましくという言葉もおかしいけれども、進んでいただきたいと思うわけです。

●もはや死ぬことのない霊的実在に変わっていく

『涅槃経』の中に、

「涅槃は無我大自在なるがゆえに名づけて大我となす」

という言葉があるそうです。「涅槃は無我大自在なるがゆえに」と。無我であるから大自在なんです。これが「無我大自在」であると。大なる自在、自由自在ということです。「無我大自在なるがゆえにこれを大我という」と。涅槃の境地は、霊的な御霊にある実存というものは、霊在、というものは――霊において存する霊存と言つたつていい――霊的な実存は、涅槃に対して、

「霊存は無我大自在なるがゆえにこれを大我という」

と言うのと同じことです。しかしどこまでも、その大我は神に即したもののほか何ものでもない。キリストに即したもののほか何ものでもない。在、主、という、主に在ること。

そういう意味において、内容が仏教的なものよりも――角度もなかなか似たものがあるけれども――もつとイエス・キリストという、お釈迦さん以上の如来的存在が、神の現神が、私たちの福音の内容ですから。それで大胆率直に――ただ



「また間違えました。どうぞ、おゆるしください」

なんて言つて、しょっちゅう同所をグルグルしているのではない――むしろ、大胆に自分の中にキリストを受けて、もはや影が見えなくなるというようなことこそ、随喜している。喜んで進んで行く。そういうことになつていきたいと思つたのです。

たとえば、バラモンの方では、

「人間における我がものという観念を捨てて、心を統一し、

「心を統一する」なんていう修行は要らんです、福音の世界は。

憐れみに専念し、醜界を脱し、

汚らしいことを脱し、

隠事より遠ざかり、ここに在つてしかもここに学ぶ人は不死の限界に達する。」

「不死の限界」というのがある。「永遠の生命」の世界のことを仏教の方では「不死の限界」なんて言う。死なざるところの限界に達するという。これはどこまでも悟りの修行による。けれども、福音は悟りの修行は要らん。人間だからいろんな面もありますよ。努力したつて何だつていい。けれども、そんなものが主動になつてはいない。

エラスムスのカトリックの方では「自由意志」を一応認めている。人間の自由意志に神さまの恩寵の助けによつてだんだんこれが救いの世界に入つてくると。ルターは、そんな自由意志なんてものはダメだと言う。自由意志はもちろんある。ルターはそんなことは知ってます。我々は物質的存在ではないんだから。自由意志はあるけれども、自由意志そのものを手放して肯定したつて、そんなものは小さなもので、いつも自我というものに囚われてどうにもならん。そんなものはもう根底的にはダメだと言つて、神の恩寵の力を、神の意志を、汝の御意を受けとる。

「われ自ら何事をも為しあたわず」

というキリストと同じように。そうすると、それは本来の、神の子であるところの霊が端的に受けとりますから。それはただ心理学的なことや哲学的なことを言っているのではない。実存的な意味におけるところの角度です。自分のうちの霊は、どこまでも私たちは本来、神の子なんですから。しかし、それが本当に実を持たない。パウロがローマ書7章で嘆いている通りの、「この悩める死の体^{からだ}」というようなやつなんです。

「この死の体より我を救はん者は誰ぞ」

と言うけれども、そう言っている願ひには霊がある。ただし、その願ひはどうにもならん。その霊がどうにもならん。しかし、これはどこまでも神のものであつて、これは受けさえすれば、その霊的存在が本当に甦る。そして、本来の、神の霊に創られたよりもっと素晴らしい霊的な存在になつていく。「アダム・イブ」というが、これは神話だけれども――神話的に「アダム・イブ」というようなことを言うけれども、そんなことはどうでもいい――とにかく、本来の我、霊的な心を持った者、魂を持った者は、本当の神の霊の、もは



や死ぬことのない霊的、實在に変わっていく。これが救いですからね。

そういう意味において、今日のところは非常に、キリストが端的に、

「神になれば、われ自ら何事をも為しあたわず」

ということは、この言葉が逆に、なんと彼は神において在ったことだろうか。神において在ったかと。神の中に在ったということです。

それを瞑想すると、私はすぐに太陽と地球を考える。自分の相対的な知恵だの、力だのというものは、もうみんなダメになる。これはキリスト、御霊でなかったらどうしますかと、自分でも思うわけです。そういうことになったら、俄然、楽になってしまった。そして、

「われ自ら何事をも為しあたわず」

「然り、アーメン」

と。

「キリストはそうでしょうけれども、私はなかなかそうではありません」

ではダメですよ、キリストの言葉が直ちに自分の告白とならなければ。恩寵の下ではそれが直ちに告白となる。

「われ自ら何事をも為しあたわず」

「はいそうです。その言葉が本当に自分の告白となりました。こんな自分に何かできるなんて思えるか。とんでもない」

ということです。そうしたらもうその自覚のもとに、

「聖霊の世界があれば何をか行き詰まらんや」

と。いいですか。皆さん、これだけここでもってぶつかって、楽しくなって、随喜現神の事態が自分の中に、何かしらんけれども、泉のごとく湧いてきただろうと私は思っています。どうぞ、くすぶったような、自分の「罪、罪」なんて言ってこだわっているようなクリスマスチャンでないようにお願いします。

●同円異中心

³⁷ また我をおくり給いし父も、我につきて証し給えり。汝らは未だその御声を聞きし事なく、その御形を見し事なし。³⁸ その御言は汝らの裏にとどまらず、その遣し給いし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。³⁹ 汝らは聖書に永遠の生命ありと思いて之を查ぶ、されどこの聖書は我につきて証するものなり。

ところが、ユダヤ人は一向、旧約聖書がキリストについて証するとは思わず、受けとらないわけだ。文字面ばかり見ている。そして、文字にこだわっている。

「儀文は殺し、霊は活かす」

というが、この「儀文は殺し」の方にユダヤ人はなる。そして、今でも、イエスがその旧約聖書の当事者であることを受けとらない。イエスが出て、パウロが出ているのに、どう



したとかと。私は世界の謎のうちの大きな謎の一つだと思っています。

40 然るに汝ら生命を得んために我に来るを欲せず。

お前たちユダヤ人はダメではないかと。

41 我は人よりの誉ほまれをうくる事をせず、⁴²ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。

本当に神と交わっていないことを知るよと。「神を愛する事なき」なんて言ったって、神と交わっていない。神さまの愛を受けてないということですよ、来ているのに。

43 我はわが父の名によりて来りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて来らば之を受けん。⁴⁴互に誉をうけて唯一の神よりの誉を求めぬ汝らは、争いで信いずることを得んや。⁴⁵われ父に汝らを訴えんとすと思うな、訴うるもの一人あり、汝らが頼たのとするモーセなり。

お前たちが拝み奉っているあのモーセだと。

46 若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録したればなり。⁴⁷されど彼の書を信ぜずば、争いで我が言を信ぜんや』

本当にモーセを受けとったなら、私が受けとられるはずなのに、実はモーセも本当に受けとっていないんだと。イエスは嘆いておられるわけです。

非常に乱暴なことを言うよと、あなた方一人びとりが宇宙の中心なんです。自分を中心として宇宙が回っているくらいに思ったってかまわない。それくらいに、自分の中にキリストというものが生きなくては。それは決して霊的傲慢をいうのではない。ということは、全然自分が自分としては認められてはいないということです。

その点で、一つの円――球と言ってもいい――同円、異中心なんだ。あなた方が一人びとりが中心なんです。そして、描くものはみんな同じ円です。物理的には成り立たない。同円異中心。中心が違っていながら、同じ円を描いている。一人びとりが神さまにおいて絶対的に顧みられている存在である。そして、この違ったいろんな皆さん一人びとりが勝手な中心なんだ。それが大きな調和をなしている。あまりに広大なる円であり球であるものだから。まあ神秘的なことをちよつと言いましたが、そういうわけです。

そのような自覚を持っていたのが、親鸞もそうだし、日蓮もそうです。

「我は日本の柱なり」

なんて。何を思い上がっているかと普通は思うでしょ。けれども、そのダメな何ものでもないような者を通して日本を背負わせる。あなた方が一人びとりが日本を背負っている。

「それは親鸞一人のためであった」

なんていうことを『歎異抄』の中でも言っている。それは本当に大我を捕まえると、そういうことになる。そして、それはもう本当にそこにおいてキリストの前に平伏している魂である。ひとつ間違えればサタンになりますよ、霊的傲慢になって。キリストは、



「私はお前の中に入って、そして、やるぞ」

という。それはキリストの前に本当に平伏して、そして、随喜現神を進んで行く。一人びとりの中に、あなたの方の中に、

「私はお前の中に入って、行うぞ」

と。それを掴まなくてはいいかん。これが本当の恵みです。それが本当にもの凄い、御霊が与えて限りなきところの力の世界である。そういうことになったら、運命環境がどうなるうと、そんなことに決して支配されない。

「**為^せんかた尽くれども望みを失わず、倒^たさるれども亡^なびず**」

とパウロが言ったのは、正にパウロはそのようなことであつた。ヨハネもペテロもみんなそうです。どんな名もなき人もみな、そのようなことにおいて神がその退^のびきならぬことをやっておられる。神の歴史というものはそのようにして形成されていく。

であるから、人生はもはや「罪」ではない。もの凄い重さを持っている。

「その中の力を、その中の原始力を、霊的なこの原始力をいかんせん」

と、随喜現神の生き方をしていくわけであります。もはや、

「まだ私はこういうことがあります、こういう罪をかつてはいたしました」

なんて、そんなことをくどくど言うことはひとつもないところに来ている。霊界において苦しんでいる人、悩んでいる人、その魂までもなお救い上げていくような、そういった祈りの人になってくる。どこまでもそこにおいてキリストが現われたもうところの、どん底になりたもうところの事態に私たちがされていく。この生命を何をもつて代えることができるかというわけです。

